

# 香川県の被差別部落

— 現地研修報告 —

安竹 貴彦

## 1 はじめに

同和問題研究室の現地研修に何度か参加し、各地の被差別部落を視察するようになってあらためて実感した事がある。それは、ひとくちに「被差別部落」といっても、各部落の現状や抱える課題は微妙に異なっているという至極当然の事である。その差異の原因は様々あろうが、筆者の専攻分野（日本法制史）のせい、歴史的背景が部落の立地や産業、あるいは同和行政に与えてきた影響は少なくないと感じる事が時々ある。香川県の場合、長宗我部氏が秀吉によって土佐に退けられた後、生駒・山崎各氏の統治を経て17世紀中頃、東讃に高松藩、西讃に丸亀藩が置かれ、さらに18世紀初期には丸亀藩から多度津藩が分置された。また古来から海上交通の要地として知られた塩飽島は、秀吉・家康らにも重視され、人名制（かつて水軍として活躍した塩飽衆が、人名として幕府の船方・加役方を負担する代償に、島の領知権や漁業権を保証されるもの）という独自の制度を有していたが、江戸時代には大坂町奉行所の管轄下にあり、定期的に役人が派遣されていた。明治初年には、この人名達が手繰漁師を襲撃し、多数の死傷者を出したいわゆる「小坂騒動」が起り、旧丸亀藩領では徴兵令を契機とする「血税一揆」の矛先が、部落にも向けられている。今回の視察では、そのような歴史的過程が、厳しい現状にあるといわれる香川県の部落に、どのような特徴をもたらししているのかに注目してみたいと思った。

さて、1994年2月9・10の両日、我々は香川県での現地研修を行った。今回は、同年度末をもって退任される村越末男教授が、同和問題研究室長とし

て参加された最後の研修でもあった。従来の各研修では山名伸作氏（大阪市立大学商学部名誉教授）が克明な記録を残され、その成果と蓄積は著書（『被差別部落を歩く』解放出版社、1990年）として公にされてもいるが、今回は筆者が不十分ながら記録係の責めを果たす事となった。法学部からの兼任研究員となって2年足らず、非常に稚拙で意を尽くせぬ記録ではあるが、御海容いただければ幸いである。なお、部落の地名は種々の配慮から、アルファベットにさせていただいた。

## 2 香川県の被差別部落の概況 —高松市—

9日は朝から低気圧の通過ともない、西日本には強風が吹きあれた。このため本州と四国の双方で、瀬戸大橋を前に天候回復を待つ電車が相次ぎ、ダイヤは大幅に乱れていた。当初の予定を変更して電車を乗り継ぎ、昼過ぎになんとか高松入りした我々は、まず最初に県庁を訪問した。

さっそく県の同和対策室の方々から、香川の被差別部落の状況及び同和対策について話を伺う。同県は5市38町（人口約100万）から構成されるが、そのうち26の市町に計46の同和地区が存在し、世帯数約3500（うち同和関係3000弱）、人口は約9500人余り（同和関係7800弱）を数える。また、同和関係人口率は県全体で82.7%と全国平均に比べてかなり高く、混住があまり進んでいない（いずれも平成2年11月現在）。同県の部落の特徴としては、近世以来の伝統で「少数点在型」である事があげられるが、そのために地区内産業とよばれるものがほとんどない。農村地域に存在する部落であっても大半が農地を持たず、島部でも京阪神へ出て建築・土木関係などの仕事に従事している人が多い。したがって生活基盤が脆弱なため、景気の変動に影響を受けやすく、これまでの同和対策事業は、住宅環境の改善や生活保護主体にならざるを得なかったという。大型の共同作業場も県下に4ヶ所ほど建設されているが、現在その全てがじゅうぶん稼働しているとはいえ、なかには生活保護受給率が50%を越える地区もいくつか存在すると聞き、非常に驚か

される。さらに「香川県は教育熱心な県」との評判通り、高校進学率も県全体では96.2%と高いのに対し、地区全体では80.2%とかなりの格差をみせている。無論、県のほうでも1958年以降、啓発活動、隣保館・児童館の設置や補充学習等の福祉・教育対策、雇用促進事業、生活環境改善事業などをおこない、ここ数年はその重点を物的事業から非物的事業へと移行させつつあるが、必ずしも着実な効果をあげているとは言えないようで、我々は到着そうそう香川県部落の厳しい現状を知らされる事となった。

県庁を出た我々は、続いて近くの建物で部落解放同盟香川県連合会（以下県連）の方々とは意見交換を行ったが、ここで耳にした部落の現状はさらに厳しいものであった。県連の調査では部落は県下の5市38町すべてに存在し、人口も推定で3万人を越えるとの事であって、未指定地区の多さが注目される。部落の所得水準は県平均の6割程度しかなく、生活保護率は全国平均の30～34倍と非常な高さを示している。解放団体のかつての闘争方針が「生活保護受給」主導であった事、それに対応して同対事業も生活扶助中心となった事などが現在にまで影響を及ぼし、今日の部落の自立意欲を削いでいる一面は否定できない。しかし、香川という地方都市の特異性や差別の厳しさも、この傾向に拍車をかけている。例えば就労面では、当地には企業の支社や出張所が多く、これらはほとんど人事権を持たされていない。そのため雇用がなかなか促進されず、新規卒業生もほとんどが京阪神に流出して、部落の高齢化を招いている。地元でせつかく職を見つけても、部落出身者とわかると体よく断られたり、職場で陰湿な差別を受けたりする事も珍しくない。また、島部出身者は部落差別に加えて、島差別という二重の差別をうける場合があるという。香川県では近年、瀬戸大橋・四国縦断道路・高松空港の建設など大型プロジェクトが相次いでいるが、これらも部落の雇用促進にうまく生かされてはいないようである。その原因としては、行政側の受入れ母体が充分とはいえない事に加えて、解放運動団体の組織的対応の立ち遅れも大きく、この点は県連幹部の方々自身が指摘される今後の課題でもある。香川県に水

平社が創立されたのは1924年と全国的にもかなり早く、戦前から墓地埋葬や結婚に関する差別事件とたたかってきた。しかし、現在では、全国自由同和会、全国部落解放運動連合会、部落解放同盟、全日本同和会（後二者が県の認知団体）の四団体が並立していて、相互の連携は必ずしも円滑とはいえ、その影響は教育問題などにも顕れている。同県の隣保館・児童館などは1980年代に入ってから建設されたものが多く、教育面での配慮はそもそも立ち遅れていたといえるが、せっかくできたこれらの施設も少数点在型という特徴ゆえに、専属職員が配属されていなかったり、教育集会所が無人になっているところもあって、じゅうぶん活用されているとはいえない。なかには施設管理をめぐって、運動団体間で鍵の取り合いをしている地域もあると聞く。他県に比べ地区の児童数が少ないという事情はあるものの、「部落の子供達に自覚を与える取り組みに乏しい」と県連の方も嘆じておられ、我々も行政・運動団体双方との意見交換から、まさにそれを痛切に感じたことであった。

### 3 丸亀市

前日のうちに高松から丸亀に移動した我々は翌10日朝、ときおり小雪のちらつくなか、お城のそばに建つ市役所を訪れ、市の同和对策課・同和教育課の方々と意見交換をおこなった。丸亀市は人口約7万7千の比較的小さな都市であるが、同和对策は京阪神の諸制度を参考に行われ、香川では先進的であるとされている。例えば、同市では8月に同和问题週間を設け啓発活動を行っているが、1991年には全国でもあまり例をみないような、「差別落書き」をテーマとしたシンポジウムを市民向けに開催したりしている。それでも、ここであがった現状と今後の見通しは、必ずしも明るいとは言えないものであった。

同市には指定地区が3地区（未指定地区が一つ）存在するが、合計しても約140世帯、350人余りで、やはり少数点在型の特徴を示している。どの地区も同和関係人口率はほぼ100パーセントに近く、混住はほとんど行われてい

ない。3地区のうちの一つは島部にあり、塩飽勤番所にのこされた古文書から、比較的その歴史を辿る事が可能であるという。香川県の部落については、どこで話をうかがっても「歴史的な事はよくわからない」という答えであったし、研究もそれほど進展してはいないようである。そもそも、同市の指定地区は旧高松藩領に集中していて旧丸亀藩領にはない、という説明をうけたが、近世には丸亀藩内にも部落が存在した事は明らかである。両藩の被差別身分に対する施策には差異があったようだが、それが今に影響を及ぼしているのであろうか。丸亀藩史料は廃藩時に、高松藩史料は戦災でその大半が失われてしまったため、現在では地方史料の調査に期待がかかっているが、是非機会を改めて香川を訪れ、確かめてみたいと感じた。

さて、部落の現状に話を戻すと、同市地区の生活保護率は平均7パーセント程度と比較的低いが、やはり地区内産業といえるものがほとんどない。なかでもA地区は差別が厳しく、周辺地域の協力がなかなか得られないために、地区内産業の育成もままならず、陰湿な形で就職差別もあとを絶たないという。そのため、この地区の人々は、戦後もしばらく全国を行商して生計をたて、その後は主に失業対策事業に従事してきた。また、島部のC地区もかつては漁業や塩田労働に携わってきたが、漁業権の問題や廃田によって職を失い、現在では岡山や丸亀に働きに出る人が大半であるという。とはいえ仕事の内容は、建築作業や工場作業が多く不安定で、昨今の不況の影響を大きく受けている。高校進学率も県の地区平均よりは高い水準を保っているが、中退者が多く、短大や専門学校に進学する子供はほとんどいない。市のほうでも現在、子供達の基礎学力や勉学意欲の向上のため、週に2～3度ずつ教員を地区内施設に派遣し、補習学習を行っている。しかし、地区外住民の十分な理解を得られなかったり、教員の熱意や地区父兄の意識に差があったりして、必ずしも着実に効果をあげているとはいえない。このため近年B地区では保護者会をつくり、学習会を開くなど地区全体を通じた活動を行っている。昨年、市長から市の同和対策審議会（市議会議員、行政職員、学識経験者、地域住民代表で構成）に対し、「同市の同和問題の現状に鑑み、今後に

おける同和行政はいかにあるべきか」との諮問がなされ、先日答申が出された（平成5年12月）ばかりであるが、この中でも教育啓発については、悪質・陰湿な差別事象（とくに「ねたみ意識」の表面化）が多発傾向にある事や、地区内学習の実効性についての指摘がなされている。その指摘通り、今後の同市の同和対策の重点が、非物的面とくに効果的な啓発・教育活動へと移されていく事を期待したい。

市役所を出た我々は昼前にB地区につき、ここの総合センター（隣保館と児童館が併設）で部落解放同盟丸亀市連絡協議会の人たちと意見交換を行った。市の北端に位置するこの地区は、丸亀城を遠くにのぞむ川沿いにあり、かつては堤防と塩田に囲まれた低湿地帯であったそうだが、同対事業により現在では土地もいくぶん高くなり、住環境もかなり整備されてきたために、今ではその面影をほとんどみる事ができない。ここに各支部の代表が集まっていたのだが、なかには前日の県連との懇談で既に顔なじみの方々も多かったので、かなり活発な討論となった。まず全体の概要について伺った後に、各支部毎の説明をしていただく。

丸亀市内には指定3地区・未指定1地区のほかにも、いくつかの被差別部落が存在するといわれている。天保期の史料には、丸亀藩が被差別身分として把握した身分に「説教師・おんぼう・かわた・番人・さる引」の5つがみえ、2800人余り（当時の藩人口の2パーセント近く）を教えたようであるが、現在では特産のうちわ作りや竹細工に従事し、経済的には比較的裕福なところもある。これらの中には後世に差別を伝えたくないという理由で、「そっとしておいて欲しい」と地区指定を拒む地域もあるという。しかし、いまだに結婚に際して身元調査が頻繁に行われる当地では、これらの地域は通婚が少なく、「身元調査お断り」運動の効果も薄い。

いずれの地区も課題として掲げられたのは、安定的「就労」と子供達の「教育」であった。かつて塩業が盛んであった時代には、部落の人たちが塩田で浜子として労働に従事した事もあった。浜子というのは、塩分の付着し

た撒砂を寄せ集めたり、集めた砂を運んで槽に入れる等の重労働を行う労働者で、賃銀は前賃が多く身売りの性格をかなり強くもつものであったと言われている。しかし、製塩法の技術革新によって労働需要が減ると、部落の人達は一番に職を失っていった。地区内産業とよべるものがないために、戦前から戦後にかけては日雇・廃品回収・砂利取り・野犬狩り・行商などで生計をたてたそうである。行商は反物・椿油・マッチ・靴や傘の修繕などで、ほぼ全国をまわったとのことだが、各支部の代表は比較的若い人が多かったので、その経験がある方はいらっしやらないようであった。この就労の不安定さは現在も続いており、例えばB地区では、求職者や日雇・パート従事者を合わせると、安定就労者の数を大きく上回る。特に失対事業打ち切り後に失職者は増加したそうだが、この事態を打開するために連絡協議会では、「丸亀同和地区開発振興会」という組織を発足させようと現在奮闘中である。この振興会は、公園・緑地清掃などの軽作業や遊休地の管理に人材を派遣し、公共事業請負等の窓口となって、求職者に就労の機会を提供しようとするものである。ただ、これを軌道に乗せるためには、行政との交渉をはじめとして、人材の確保や社会保険など克服しなければならない問題は多い。しかし、同様の試みは滋賀県の同和地区でも行われており、今後におおいに注目したいと思う。

教育の面でもB地区では、ようやく一昨年センターを利用した解放学習がはじまり、前述のように父兄と児童が一体となった取り組みを行いつつある。ただ、高校入学と同時に関心を失ってしまう子供が多いために、子ども会活動や学習に継続的に参加し、将来は自らが運営の中心となるような自主性、主体性を育てる事、そして、そのような魅力ある活動を行う事が今後の課題であると話しておられた。その点で島部のC地区はここ数年、その特徴を生かしたユニークな試みを行っている。支部の青年部・女性部が中心となって、夏期に海水浴場休憩所（宿泊も可）の運営を行い、子ども会の活動資金を調達するとともに、子ども達にそこでアルバイトをさせ、交流と自立心の育成とを目指そうとするものである。漁協との交渉など紆余曲折を経て

やっとスタートしたこの試みも、昨年は冷夏とサメ騒動で海水浴客が少なかったそうで、苦勞の種はなかなか尽きないようであるが、順調な発展を祈らずにはいられない。

昼過ぎにB地区をあとにし昼食をすませた後、次の研修先である普通寺市へ向かった我々は、途中で短時間ながらA地区に立ち寄る機会を得た。その美しい形から讚岐富士とも呼ばれ、古来から歌にも詠まれてきた飯野山の麓にひろがる農村地帯のなか、香川県の特徴の一つであるため池のそばにA地区（50数世帯、150人余り）はあった。かつてはこの地区にも農家が数軒あったそうだが、今日では農業で生計を立てている世帯はない。時間の都合で地区内をくわしく視察する事はできなかったが、改良住宅や公営住宅が比較的多く、住環境に限ってはかなり整備されている印象を受けた。しかし、市の話でも先程の懇談でも、この地区は特に差別が厳しいとの事であった。採用の段階で地区住民とわかると体よく断られたり、結婚後の親戚つきあいを一切絶たれたりする事は珍しくないという。

ここでは1982年に設置された共同作業場を見学させていただいた。8人ほどの小規模な縫製工場であったが、一人の女性がわざわざ仕事の手をとめ、気さくに作業内容の説明と実演をしてくださった。この作業場では、平日の午前8時半から午後4時半まで、ジーンズ縫製の下請け作業を行っている。以前はここで完成品にまで仕上げていたのだが、最近は人手不足と不況による仕事減のために、半製品の段階で出荷せざるを得ない。一枚につき幾らの賃作業であるが、近年は中国や韓国に発注したほうが人件費が安くつくため、この作業場への仕事の依頼が減りつつあるという。ポケット付けの作業を見学させてもらいながら、「なにげなく穿いているジーンズにも、実に様々な人々の労働が反映されている」という感慨と、「いつの時代も部落は、景気の調節弁の役目を負わされ続けている」という思いとが入り混じり、いささか複雑な心境であった。



## 4 善通寺市

丸亀市A地区を視察した後、午後2時過ぎに善通寺市役所を訪れた我々は、同和对策課の方と隣保館長から同市の被差別部落の状況について話を伺った。1954年に1町4ヶ村が合併してできた善通寺市は、香川県の5市の中で唯一海岸線を持たない人口4万人足らずの小さな街である。真言宗の開祖空海の生誕地として、また自衛隊の駐屯地としても知られるが、かつては真言宗総本山善通寺の門前町として栄え、明治時代には第11師団が置かれ軍都としても発展してきた。

同市には指定地区が二つ存在する。D地区が217世帯、495人から構成される全く混住のない地区であるのに対し、E地区は158世帯（うち同和関係122）、403人（同和関係307人）と若干の混住が見られる。近世においてはD地区が「えた」部落、E地区が「非人」部落であったとされ、特にD地区は蜂須賀家の武具用に皮革加工をした部落ともいわれるが確証はない。元来、讃岐地方では牛馬の絶対数が少なかったために、斃牛馬処理と皮革生産に携わる部落はそれほど多くなく、それが近世香川の大多数の部落に、雑業や治安警察の末端業務に従事する事を余儀なくさせた一因ともいわれている。今後の歴史的研究の進展に興味を持たれる。

ここでの話でも、課題はやはり「安定的就労」と「教育・啓発」であり、物的事業に比べて非物的事業の立ち遅れが感じられた。両地区とも生活保護受給率が非常に高く、継続的に45パーセントを越えている。地区内産業といえるものがなく、戦後しばらくまでは行商が盛んであったが、現在では資源回収や露店商を営む世帯が少なくない。市のほうでも産業育成を目指し、し尿の有機肥料化計画や、ため池を利用した養鰻施設の指導などを行ってきた。しかし、前者は下水の普及で頓挫し、後者も台湾産などに押されて現在は休業状態であるという。D地区には昭和60年度に同対事業の一環として、収納庫と解体場からなる資源回収場が建設された。これにより部落の環境整備は進んだが、昨今の不況に加え、同市で推進したりサイクル運動の影響で仕事

が減ったために、稼働率は非常に低くなっている。分別収集された資源は入札で民間業者に渡されるが、個人には入札への参加資格がないために、地区の人たちがリサイクル運動を担う事が、事実上不可能になっているのである。他県では地区ぐるみで組織化して入札に参加し、資源回収を行っているところもあるが、同市ではそのような動きはまだみられない。

教育面で抱える悩みも大きい。高校中退者が多く、大学進学者は皆無に等しいし、教員との連携や地区の子ども会活動も順調とはいえない。時には子供達が暴れ、これを抑えに隣保館関係者が中学校へ出向かねばならない事もあるそうだが、地区周辺では「非行」イコール「部落」という古典的な考え方も依然として根強く、私立高校の中には不祥事を恐れ、地区の子どもの受け入れを渋るところもあるという。

これらの原因として、生活保護の慢性化やそれに伴う自立度の低さなど、部落自身が抱える問題を挙げる事もできるが、香川県の中でも特に厳しいといわれる差別が、それを余儀なくさせているのもまた事実である。前述の丸亀A地区同様、町名を聞いただけで求人断られ、折角就職しても職場で差別を受けてやめてしまう事も多い。通婚も近年は幾分増えてはきたが猛反対される事が多く、それを押し切って結婚すれば、勘当同然の扱いを受ける事も珍しくない。また、D地区近辺の地価は、他町の2分の1から3分の1程度しかないし、越境通学が非常に多いために、ここを校区に含む小学校は、各学年に1学級しかない。同和対策課の方はこのように率直に現状を話して下さったが、四国の京都とも例えられるこの歴史の街が抱える課題は大きく、現状打開のためには、非物的面での一層の質的充実が不可欠であるように感じられた。

市役所からマイクロバスを出していただき、午後4時前に最後の研修地であるD地区に着く。この地区も農村地帯の川沿いに位置しており、かつては劣悪な環境で、道で傘もさせないほど家々が密集していたそうだが、現在では改良住宅や公営住宅が整然と建ち並んでいる。教育集会所で我々を待つて

いてくださった地区の方々と、さっそく意見交換にはいったが、なかでも筆者に印象的であったのは、年配の方々が素朴な言葉で語られる生活の歴史と、厳しい差別の現実であった。

農村地帯にもかかわらず、この地区の人たちも農地を持たず、小作に従事する事もなかった。戦前から1950年頃までは、部落内で草履作りなども行っていたそうだが、やがて靴修理、衣料、油、もぐさなどを扱う行商が主になっていく。我々にその体験を語って下さった方は、中学にあがってすぐに行商を始めたそうだが、日本全国を巡り人生の半分を旅で過ごしたと回想しておられた。単独あるいは2、3人で行商に出、旅先から数日毎に送金を続けるのだが、3、4ヵ月から半年間は故郷に戻らないため、普段は部落に男手がほとんどない。年に二度、秋祭りと旧正月にだけは皆が戻ってくるので部落全体が活気づき、家族や友と顔を合わせるのが楽しみであったそうである。しかし、そのような時でさえ部落の人々は周辺から排除され、かつては神社の境内へ入る事も許されてはいなかったという。

なかには敗戦後に、もっと厳しい行商を体験した方もおられた。親の前借のかたとして子どもが親方に連れられ、街に行商に出るのであるが、彼らは学生服を来て苦学生のふりをし、ゴム、鉛筆、樟脳などの雑用品を売り歩かされる。某大学生と偽って行商に訪れた先の子どもが、偶然その大学の学生だったために非常に慌てた話や、偽りの身の上話をしている内に同情され、養子にしたいと言われた話など、様々な思い出を笑顔も交えて話して下さったが、売上が少ないと親方に厳しく責められるため、宿に帰れず野宿した事も度々であったという。前借をした親に迷惑が懸かるため、逃げる事もままならないというあたかも前近代の人身売買のような話で、1960年代生まれの筆者には想像もつかないような事であったが、話して下さった方はこのような行商を14～5年も続けたという。しかし、これらの厳しい行商さえ、差別を助長する原因となった。旅先で覚えた全国各地の方言が部落内で使われるため、異質な言葉を使う集団として、周辺からいっそう疎外される事になったのである。やがて、これらの行商も安価な既製品に押されて下火になり、

仕事の中心は廃品回収へと移行していく事になったが、前述のごとく、現在ではこれもほとんど仕事にならない状況が続いている。

また、市役所での話にもあったように、この地区の人々は現在でも厳しい差別の中で暮らしている。昔から県内でも一番差別が厳しかったそうだが、いまでも「普通寺の〇〇」と名乗ると、この小さな街では地区出身者とわかり様々な差別を受ける事がある。そのため、若者達は高校卒業と同時にほとんどが近隣の市に出てしまい、結婚しても敢えて妻方の姓で生活する事も多いという。根強い差別に立ち向かっていくためには若い世代への啓発が不可欠で、それがこの地区の人々の課題の一つでもあるのだが、世代間の意識のずれは地区内にも押し寄せていて、なかなか順調にはいっていない。かつて地区内にあった共同浴場は、内風呂の普及によって数年前になくなり、また、子ども達もテレビゲームに夢中で世代間・世帯間の交流の場が失われつつある。香川県の被差別部落と同和行政が抱える共通の問題点、すなわち生活保護を含む物的事業への偏重と、就労・教育・啓発面での立ち遅れが、この地区にも如実に表れているといえる。意見交換が終わった後、わずかな時間を利用して共同作業場に立ち寄ったが、解体場に山積みになったままの大量の廃品が非常に印象的であった。